我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◉第五話　定助少年、「化ける」

祖父定助が二才の年、生母が発狂したと伝えられる。どのような病であったのかは、今日、知る由もないが。彼女は座敷牢に入れられた末、離縁されて実家へ帰された。

定助の父、和三郎は後添を娶った。気の強い女だったと祖母キクは伝える。この女性は定助の妹と弟を産んだ。

定助は和三郎と義母に育てられるが、冬は鼻汁を垂らし、それを着物の袖で拭い、テカテカさせていたという。

「この子、阿呆ちがうか」と塩田家の人々は口々に言ったというが、一門の中で大塚のオバさんという女性だけが、「いや、この子は賢い」と言い張ったという。

超大物を例えに引くのはおこがましいが、アルベルト・アインシュタインも言葉を覚えるのが遅く、両親からは、阿呆と見なされていたという。彼の場合は、叔父が「いや、この子は天才だ」と言い続けたようだ。

ある種の子供達は幼時期の発達が遅いが、ある時急に「化ける」ものである。祖父定助も小学校の高学年になって、メキメキと素質を表し、尋常高等小学校は学年トップで卒業した。

和三郎夫婦は中学校へはやらず、家で商売の手伝いをさせた。

こうして、定助少年は父の商売を助けて、詫間や荘内半島や粟島のお百姓衆から換金作物を買い付けては大阪に売りに行った。

世は大正の御世となり、日本の版図は大陸へと大きく拡がろうとしていた。

定助は、長身大兵の青年となった。

◉第六話　芋壺と学校

三才で大阪から仁尾へ引き揚げてきた祖母キクは大のお転婆娘だった。「勝子」の名にふさわしく、近くの賀茂神社（京都の賀茂神社の分社で広大な神域を有する）を駈け廻り、近くの男の子達と競って石橋の欄干（下には川が流れている）に飛び乗ると、その上をタッタッタッと駆けて跳び降りる遊びにスリルを楽しむという、泰田の高祖父母が心配した通りの「勝気で男勝り」な少女に育っていった。

父の慶吾が博打に入れこんだ挙句、逐電してしまったから、家は貧しかったが、明るく元気に仁尾の町を遊び回っていた。

中でも、祖父母のいる詫間越えの本家へ行くのは楽しみだった。おばあさんは、あれほど反対したにもかかわらず、祖母のことを「カ～よ」（勝子のこと）と呼び、縁側の下に掘ってある芋壺へ入って、イモをもってこいと言うと、祖母は土中の壺へもぐってイモをかかえて縁側に這い上がるというのが、大の楽しみだったのだ。おばあさんはイモを焼いたり、ふかしたりすると二人して、おやつとして食べたという。

詫間越えの泰田の本家では、まだ、江戸時代の時間がゆったりと流れ、祖母キクはそうした農家の暮らしが大好きだった。

だが、祖母がもっと大好きだったのは学校だった。学校の先生に憧がれ、同級生の男子からは「たいでんしょうし」（泰田勝子の音読み）と呼ばれ、対等に渡り合うという「魔法の空間」だったのだ。

祖母のこの学校への情熱は尽きることがなく、やがて、孫の私にまで注がれることとなる。

（しおた　みつき／アジア経済研究所　貧困削減・社会開発グループ）